

“ 今月 ”を理解する

# メディアレビュー

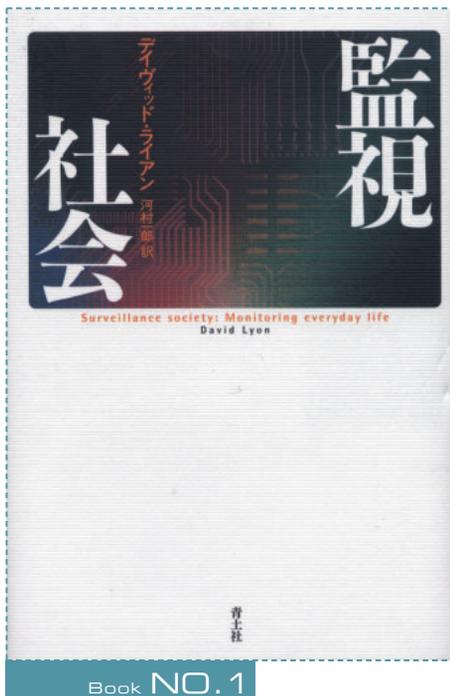
# MIX

インターネットにつきもののスパムとスパイウェア。特にマシンをクラッシュさせるわけでもないのに、「ウザイ」と思いながらも対策をしていない人が多いのではないだろうか。今月は、「これらが今後放置されるとどのような世界が訪れるのか」「放置しないための対策はどのようなものか」という視点を中心に、7本のメディアをレビューする。

スパム、スパイウェアの存在が提示するインターネット社会の本質を探る

MEDIA REVIEW MIX

## 「監視社会反対!」と批判するだけでは理解できないIT社会の側面



『監視社会』

著者: デイヴィッド・ライアン

訳者: 河村一郎

発行: 青土社

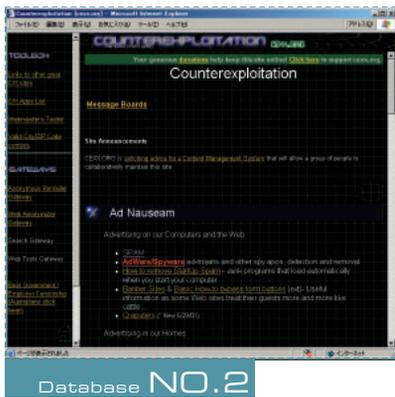
電子ネットワークの出現で、権力がどう編成されなおすのか。その本質を社会学的観点から描いている。

監視社会という言葉を聞くと、たいていの人はジョージ・オーウェルの小説『1984年』を思い起こす。ビッグブラザーと呼ばれる独裁者が国民全員の一挙手一投足までも監視し、抑圧するという設定だ。だが「政府 - 市民」という二元的な構図はあまりにも古く、ネットによって社会のパラダイムがひっくり返ってしまったこの時代には通用しない。なぜ企業がマーケティングと称してスパイウェアを使い、市民を監視して個人データを集めようとするのか。生身の身体の実感が薄くなり、個人データがネット上で独り歩きしはじめているのをどう受け止めればいいのか。そんな疑問に、『1984年』モデルは答えてくれないからだ。

カナダ・クイーンズ大で社会学の教鞭を執るデイヴィッド・ライアン教授が書いたこの本は、そうした疑問への回答の手がかりを与えてくれる。それによると、監視とは政府が市民を抑圧するためにだけ存在するのではなく、IT社会の不可欠な要素だというのだ。社会のIT化は必然的に監視社会化をもたらす、そして監視社会化は人間のコミュニケーションに大きな

影響を与える。監視はある種のコードであり、社会のシステムに組み込まれたルーティンでもある。

IT社会では、生身の身体代わりに、抽象化されたコードによって個人の認証が行われていくという特徴を持つ。そうした社会の中では、データがさまざまな形で収集され、流通していく……つまり“監視”されていくことになる。そしてそれにはメリットもある。1人の人間の情報が集積され、一括処理されることで、社会生活をより便利にすることも可能だからだ。だがこうした情報の集積が行われるということは、同時にさまざまな政府機関で採取されている個人データが、簡単にマージできてしまうということにもつながる。本人の知らないうちに「デジタルデータから再構成した人物像」が生み出されてしまうのだ。データマッチングの気まぐれから、ごく平凡な市民がテロリストに分類されることだって十分ありうるのではないかと。アドウェア(スパイウェアの一種)などというものがなぜ流行し、オフィシャルなマーケティングツールとして大手を振って存在することができるのか。「監視社会反対!」という古典的な批判だけでは理解しえないIT社会の本質を、この本は明快に示してくれる。



### 『Counter Exploitation』

オンラインプライバシーの活動家である大学生2人が運営しているという、これほどの規模のスパイウェアデータベースは、ほかに類を見ない。

URL <http://www.cexx.org/>

## アドウェアは「個人情報」という高い対価を求める麻薬だ

Counter Exploitation(搾取的なカネ儲けへの抗議)と名づけられたこのサイトは、スパムやスパイウェア、バナー広告、テレマーケティングなどを槍玉に挙げ、その対処法を徹底的に調べ尽くしている。その中でも「アドウェア、スパイウェア、そのほかの迷惑な犯罪のソフトの数々……これらをどう取り除くか」という長い題名がつけられたページは、現在出回っているスパイウェアの大半を網羅した詳細なリストを掲載していることで有名だ。アドウェアやトロイの木馬、ホームページ・ハイジャッカーなどのジャンルに分けて、数百ものスパイウェアを掲載。それぞれについて侵入経路や除去方法を事細かに記している。データベースとしても一級品だ。

運営者は、アドウェアを「ドラッグディーラーウェア(Drug Dealer Ware)」と呼んで

いる。麻薬の売人は最初、客に無料でコカインやヘロインを試させる。そして客が麻薬中毒に陥ったと見ると、いきなり値段を釣り上げて売りつけるようになる。最初は気軽に麻薬を楽しんでいた客も、その時にはもう逃れられなくなっている。高いカネを払って、売人から麻薬を買い続けるしかない。アドウェアも、最初は無償のフリーウェアと同じように見える。だがユーザーがダウンロードして使い始め、しばらくしてから、そのソフトが自分の個人情報を垂れ流していることに気づく。だがその時にはもう遅い。すっかりアドウェアが指に馴染んでしまって手放せなくなっていたり、あるいはそのソフトでしか使えない独自のファイル形式で多くのデータを保存してしまっていたり、となるのだ。なるほど、確かに麻薬の売り方に似ていないこともない。

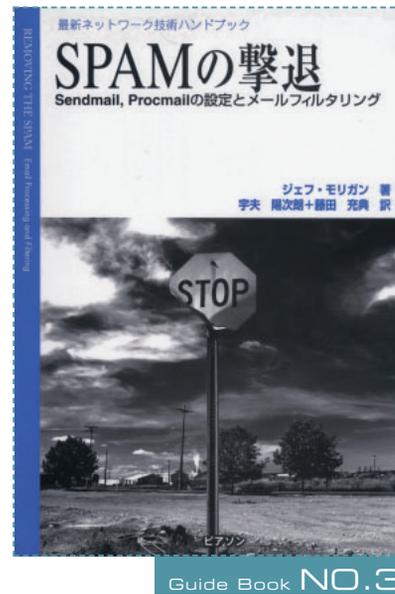
---MEDIA REVIEW MIX---

## 一目でわかる、詐欺犯罪のデパートとしてのスパムの特徴

スパムの具体的な対処法について詳しく書いた本は、意外に少ない。この『SPAMの撃退』は、徹底的に実用性を追求したアンチスパムガイドブックだ。その内容は、SendmailとメールフィルタリングシステムのProcmail、そしてメーリングリストでのスパムの防御方法の3つに分けられている。その中でももっともスペースを大きく割いているのは、Sendmailの設定方法だ。入手方法や一般的な設定ファイルの構築方法から始めて、スパム防御のためにメールの中継を停止する設定の仕方などが詳しく書かれている。取り上げたソフトの入手方法やコンパイル、インストールの手順もわかりやすく説明されており、初心者にも理解しやすいだろう。

本の冒頭にはスパムの歴史や分類、アンチスパムがこれまでたどってきた経緯

などが書かれているが、この部分が実は非常におもしろい。特に1998年に米連邦取引委員会(FTC)が発表したスパムの分類表「Dirty Dozen Spam Scams(12の汚いスパム詐欺)」は一読の価値がある。この分類表は「Get Something From Scams(参加費を払わされたうえ、あなたがほかの人を騙して勧誘するまで約束された商品は手に入らない)」「Investment Opportunity(『うますぎて本当とは思えない』ほどの驚くべき率の見返りが約束される)」「Vacation Prize Promotions(結局標準以下の宿泊施設にアップグレードするために、多額の手料を払っていたことが判明する)」といった文章で一般的なスパムを分類しているのだが、これを見ればスパムが詐欺犯罪のデパートであることがよくわかる内容になっている。



『SPAMの撃退  
Sendmail, Procmailの設定とメールフィルタリング』  
著者: ジェフ・モリガン  
訳者: 宇夫陽次朗、藤田 充典  
発行: ビアソン・エデュケーション

スパムの排除に焦点をあてた電子メールシステムの導入、運用を行うための実用的なガイドブック。SendmailやProcmail、Majordomoなど一般的なメールシステムを使ったスパム対策がまとめられている。

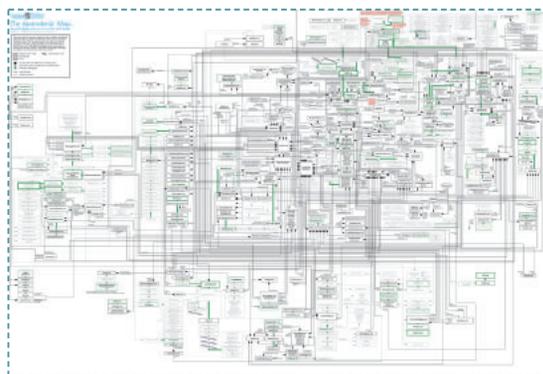
## 恐るべきスパム業者のネットワークを覗く

スパムというのは、洪水のようなものだ。最初は堤防に小さな穴が開き、やがて奔流となり、すべてが押し流される。スパムも、最初はほんのわずかな数が送られてくるだけだ。だがその量は徐々に増え、やがてはメールボックスを溢れさせ、ほかのメールが埋没するまでになる。なぜ自分のメールアドレスが流出してしまったのだろう？ そして次から次へと新手のスパム業者が自分のアドレスを入手しているのは、いったいどういうわけなんだ？

そんな疑問に答えるのが、このSpamdemic Mapという途方もない労作だ。メールアドレスがどのようにしてスパム業者の間で流通し、販売されているかを追跡し、そしてその全体像をビジュアル化したものだ。フルサイズバージョンはGIFファイルで767KB。サイズは4440 ×

2903ピクセルもある。星の数ほどのスパム業者がこの地図には散りばめられているが、作成したアンチスパム活動家のボブ・ウエスト氏は、ウェブサイトでこう書いている。「ここにある業者のほとんどが、私のメールアドレスを1つか2つは持っているようだった。そしてその多くが、私あてにスパムを送ってきている。もちろん、私はこいつらにメールアドレスを渡した記憶はないし、スパムを送っていいと認めたこともない」。

自分のアドレスもこの広大な地図のいたるところに埋まっているかもしれない。そう考えると、この無機質なネットワークからスパム業者の恐るべきパワーを感じてしまう。



Spam Map NO.4

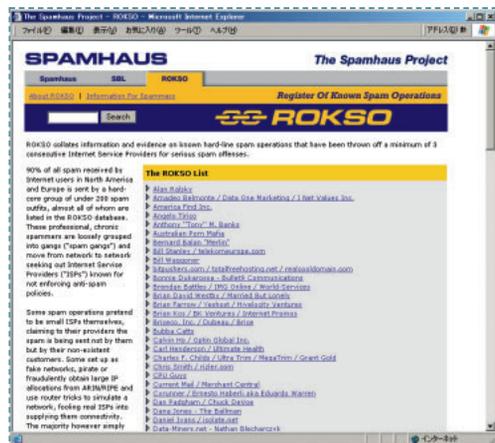
### 『Spamdemic Map』

メールアドレスがスパム業者の間でどうやりとりされているのか、その全貌がわかる地図。作成者のサイトでは、アンチスパムの商品もオンライン販売している。「Kill Spam Before It Kills The Internet(スパムがインターネットを殺してしまう前に、スパムを殺せ)」なんていうTシャツがあったりする。

URL <http://www.cluelessmailers.org/>

© Copyright 2002-2003, Robert M. West, All Rights Reserved

## MEDIA REVIEW MIX



Anti Spam portal NO.5

### 『The Spamhaus Project』

アンチスパムのサイトとしては、もっとも有名なものの1つ。「Spamhaus Project」はスパム業者やスパムをサポートしている悪徳企業を追跡する。そしてプロバイダーや捜査当局と協力し、彼らの正体を暴いてインターネットから排除していくと宣言している。

URL <http://www.spamhaus.org/>

## 2つのデータベースを使い 殺られるまえにスパムを殺る

スパムハウス (Spamhaus というのは、スパム業者のアカウントを停止せず、やりたい放題をさせているホスティング企業やプロバイダーのことだ。さらにはスパム配信をビジネスにしている自称プロバイダーもあり、それらもスパムハウスと言える。彼らは、プロバイダーを名乗って通信キャリアと契約し、バックボーンを確保したうえでスパム業者から代金を受け取り、世界中にスパムを配信するインフラを提供するのだからたちが悪い。

その「たちの悪いホスティング業者、プロバイダー」の名前を冠したサイト「The Spamhaus Project」は、アンチスパムのポータルとも言える存在で、コンテンツの中心は2つのデータベースを提供している。

その中の1つ SBL (The Spamhaus

Block List) は、スパムの発信元と見られているIPアドレスのデータベースだ。メールサーバーの管理者は、このデータベースを使って自分のメールサーバーに届くスパムをシャットアウトすることができる。IPアドレスやプロバイダー名からシャットアウトしたいスパムを検索することも可能だ。

もう一つのデータベースが、ROKSO (Register Of Known Spam Operations) 過去に報告されているスパム業者を集めた巨大な電話帳である。スパムの文面や使っているドメイン名、住所、会社名、送信者名に加え、スパムが最初に記録された日時、最近記録された日時、使っている別名、送信元のIPアドレスなどありとあらゆる情報が掲載されている。この2大データベースを使えば、大量のスパムにやられる前に、スパムとそれを配信する業者を殺ることができるだろう。



Adware Company **NO.6**

### 『Cydoor』

アドウェア業界大手。オフィスは米ニューヨークとワシントン、それにイスラエルのテルアビブにある。ポップアップやバナー、電子メール広告などを提供している。

URL <http://www.cydoor.com/>

## アドウェアは何もアンダーグラウンドな世界からやってくるだけではない

トップページ上に文字が浮かび上がる。「5500万人のユーザー」「カミソリのようにシャープなターゲティング」。その横では、やり手のビジネスパーソンたちが、ノートパソコンに見入っている。

赤を基調にしたサイトデザインは、あくまでもクール。そんなトップページを持つCydoorは、一見すると真つ当なネット系のベンチャー企業に見える。しかし、アドウェアの場合、このような一見普通の企業が提供者となっていることが多いのだ。

Cydoorのパートナーは、インターネットブラウザのOperaや翻訳ソフトのBabylon、ダウンロードのFlashGetなど有名どころが多い。これらのソフトをインストールすると、同時にCydoorのソフトも導入される。いったんインストールされると大

量のポップアップ広告をユーザーのパソコンの画面に表示する。もっとも、サイトに掲示されているプライバシーポリシーには、こんなふうには書いてある。「入力フォームを使い、性別や年齢、興味、配偶者の有無、給与、居住地、学歴などの統計的なデータをたずねることがあります。名前や住所、電話番号などの個人データは収集していません。これらのデータを収集するのは、広告のターゲットを見定めるためです」。

こうしたデータが流出しないという保証はどこまでされているのだろうか。あるいはもし仮に、同社が第三者に売却されたり、清算されたりした場合にはどうなるのだろうか……。この企業の動きをウォッチするとアドウェアの「広告ターゲットを見定める」という機能以外の本当の恐ろしさが見えてくるのだ。

MEDIA REVIEW MIX

## アドウェアが進化した未来を細部にわたって精密に再現

アドウェアが進化し続けるとどうなるか。フィリップ・K・ディックの原作をスピルバーグが撮ったこの映画は、その恐るべき世界を細部にまでこだわった現実感とともに見せてくれる。

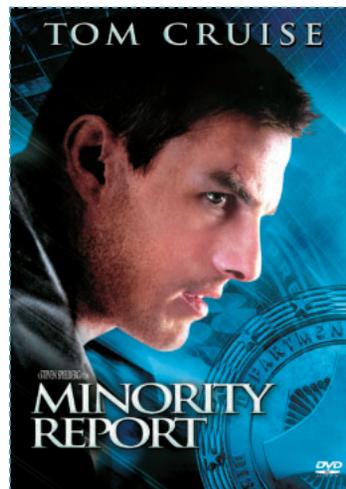
トム・クルーズ扮する主人公のジョン・アンダーソンが警察当局から殺人犯と予知され、逃亡を続けるシーン。地下鉄駅のコンコースにさしかかると、バイオメトリクスを使った網膜スキャンシステムが主人公の目を識別し、壁面の動画広告が突然動きだす。そしてこう呼びかけるのだ。「アンダーソンさん、ギネスビールはいかが?」「アンダーソンさん、レクサスに乗ってみませんか?」

人々が買い物をして、レストランで軽く食事をする。美術館でアートを鑑賞し、さまざまな場所に旅行に出かける。そうした個人データはネット経由でことごとく企業

や政府に収集され、すべてサーバーに蓄積されていく。そしてその企業や政府は、人々の立ち回り先をどこまでも追いかけて、ターゲットされた広告などを目の前に差し出し続ける。

これは現在のアドウェアとコンテンツターゲット広告を組み合わせたモデルにそっくりではないか。つまりインターネットブラウザの履歴を収集してインターネット経由で広告主のサーバーに送信し、収集した情報をもとにユーザーの好みに合わせたポップアップ広告を画面に繰り返し表示するという、うんざりするようなアレだ。

マイノリティ・リポートでリアルな未来像を見せつけられると改めて気づいてしまうが、何でも先回りされて「ほら、おまえのほしいものはこれだろ?」と目の前にぶら下げられるというのは、やっぱり気持ちのいいものではない。



Movie **NO.7**

### 『マイノリティ・リポート』

監督：スティーブン・スピルバーグ

DVD発売中

3,980円(税抜)

20世紀フォックス ホーム エンターテインメント

URL <http://www.foxjapan.com/movies/minority/>

メディアレビュー  
**MIX**



## [インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ] ご利用上の注意

このPDFファイルは、株式会社インプレスR&D(株式会社インプレスから分割)が1994年～2006年まで発行した月刊誌『インターネットマガジン』の誌面をPDF化し、「インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ」として以下のウェブサイト「All-in-One INTERNET magazine 2.0」で公開しているものです。

<http://i.impressRD.jp/bn>

このファイルをご利用いただくにあたり、下記の注意事項を必ずお読みください。

- 記載されている内容(技術解説、URL、団体・企業名、商品名、価格、プレゼント募集、アンケートなど)は発行当時のものです。
- 収録されている内容は著作権法上の保護を受けています。著作権はそれぞれの記事の著作者(執筆者、写真の撮影者、イラストの作成者、編集部など)が保持しています。
- 著作者から許諾が得られなかった著作物は収録されていない場合があります。
- このファイルやその内容を改変したり、商用を目的として再利用することはできません。あくまで個人や企業の非商用利用での閲覧、複製、送信に限られます。
- 収録されている内容を何らかの媒体に引用としてご利用する際は、出典として媒体名および月号、該当ページ番号、発行元(株式会社インプレス R&D)、コピーライトなどの情報をご明記ください。
- オリジナルの雑誌の発行時点では、株式会社インプレス R&D(当時は株式会社インプレス)と著作権者は内容が正確なものであるように最大限に努めましたが、すべての情報が完全に正確であることは保証できません。このファイルの内容に起因する直接のおよび間接的な損害に対して、一切の責任を負いません。お客様個人の責任においてご利用ください。

このファイルに関するお問い合わせ先

**株式会社インプレスR&D**

All-in-One INTERNET magazine 編集部

[im-info@impress.co.jp](mailto:im-info@impress.co.jp)